

第15回静岡県内外の災害ボランティアによる
救援活動のための図上訓練 プレセミナー

「図上訓練って何？」

～静岡式図上訓練14年のあゆみ～

常葉大学静岡草薙キャンパス社会環境学部 准教授 小村隆史氏

進行:(特活)静岡市障害者協会 松山文紀

正式名称は…

静岡県内外の災害ボランティアによる

救援活動のための図上訓練

と、長いので

通称：「**図上訓練**」

2005年度に始まり、毎年1回開催、今年で15回目

どんな訓練？（目的）

- 南海トラフ地震等により、静岡県内の複数市町が被災すると、公助のみならず、様々な立場の民間組織等による支援活動が行われることが想定されます。被災者・被災地支援のために、市域、県域、県外との「つながり」を意識した支援体制を創造することを目的とした訓練(ワークショップ)を開催します。
- 本訓練は、静岡県外からの関係者も多く参加していることから、広域災害時の「受援」を意識した訓練として、全国的に注目されています。
- 被災者・被災地には様々な困りごとがあり、その困りごとを解決していくためには、災害ボランティア本部(災害ボランティアセンター)だけではなく、多様な支援者がつながることが欠かせません。そのことに気付き、次のアクションにつなげられるようになることを目的としています

※この訓練は災害対応を検討する「シミュレーション型図上訓練」ではありません

どんな訓練？（参加者属性）

- 災害ボランティア（現地活動未経験者を含む）
- 災害ボランティア関連講座の受講修了者
- 社会福祉協議会職員（ボランティアセンター担当など）
- 被災地支援を行う国内NPO・NGO
- 市民活動団体（各種）やNPO・NGO
- 士業（弁護士、司法書士、行政書士など）
- 行政職員（県、市町村、内閣府など）
- 大学・研究機関、業界団体
- 地縁組織（自治会、自主防災会、民生委員、消防団など）

どんな訓練？（参加者数）

参加者数	県内	県外	見学・ ピジター	その他	合計	プログラム企画
第1回	102	24	25	31	182	訓練世話人会
第2回	72／80	36／46	9／12	23／24	302	訓練世話人会
第3回	108／115	57／57	18／14	22／40	431	訓練世話人会
第4回	164／169	89／88	4／4	33／37	588	ネットワーク委員会
第5回	206	83	17	35	341	県外若手有志
第6回	162	74	14	49	299	ワーキンググループ
第7回	193	90	21	39	343	ワーキンググループ
第8回	219	117	7	80	423	ワーキンググループ
第9回	176	119	41	85	421	ワーキンググループ
第10回	155	71	54	54	334	ワーキンググループ
第11回	127	60	55	67	309	ワーキンググループ
第12回	135	60	54	64	313	ワーキンググループ
第13回	119	61	69	64	313	ワーキンググループ
第14回	121	58	84	81	344	ワーキンググループ
延べ	2,423人	1,190人	502人	828人	4,943人	←14回までの合計

どんな訓練？（形式）



- 全体ワーク: 全参加者対象の座学や事例共有
- グループワーク: ワークショップ形式で課題に取り組む
- 共有会議: グループの情報を県域で共有する

第14回は、グループに進行役を配置



13回のグループワークの利点を踏襲し、県内はエリアを考慮しつつ、市町混合(4名)+県外P(2名)のグループでワークを実施

グループごとにファシリテーター(進行補助役)を配置し、スムーズな進行に取り組んだ

県外プレイヤーの役割

- ・ 県外プレイヤーがどのグループに入るかは、その年によって方法が異なりますが、県外プレイヤーの意向(どこに入りたいか、発災後にどこに入る予定をしているか、など)が尊重できるように調整されており、第14回は、入ろうとする市町のプレイヤーと可能な範囲で同じグループになるように調整しました。また、グループの人数が均等になるように、県内4名、県外2名 として事前にグループ分けを行いました。第15回も同じ人数設定です。

県内の各市町	県外プレイヤー	調整等
②希望する団体を指名	①得意分野をプレゼン	③県V本部が調整
②県外Pの動き待ち	①希望の市町に直接入る	③偏りを県V本部が調整
③入る県外Pは当日発表	①事前課題で希望を申告	②県外P希望を踏まえ事前調整
③グループメンバー当日発表	①入る予定の市町を確認	②県内4人、県外2人のグループ

第10回から ビジタープログラムを導入

- ★訓練を客観的にみる(把握する)ことができる
- ★プレーヤー参加に気が引ける方への参加枠
- ★新しい業界や分野の方への広報
- ★行政や企業などに参加しやすい枠
- ★訓練をどのようにつくってきたか(企画側)の紹介(他地域での横展開への期待)
- ★ワークの見所や落としどころの解説

→より多くの業界や分野の方に参加してもらいたい



ビジタープログラムの様子(第14回)



「企業としての被災地支援」

はままつ na Net
代表世話人 柳原さん



「突然の被災、その時行政は」

熊本県 嘉島町 町民課 園田さん



理事 藤田さん

「静岡県行政書士会の取り組み」



静岡県行政書士会の
会長さんもビジター参加

交流会の様子(第9回からプログラムに組み込まれた)



ご当地PRタイム



ビジター参加の
西伊豆町長

どんな訓練？(財源)

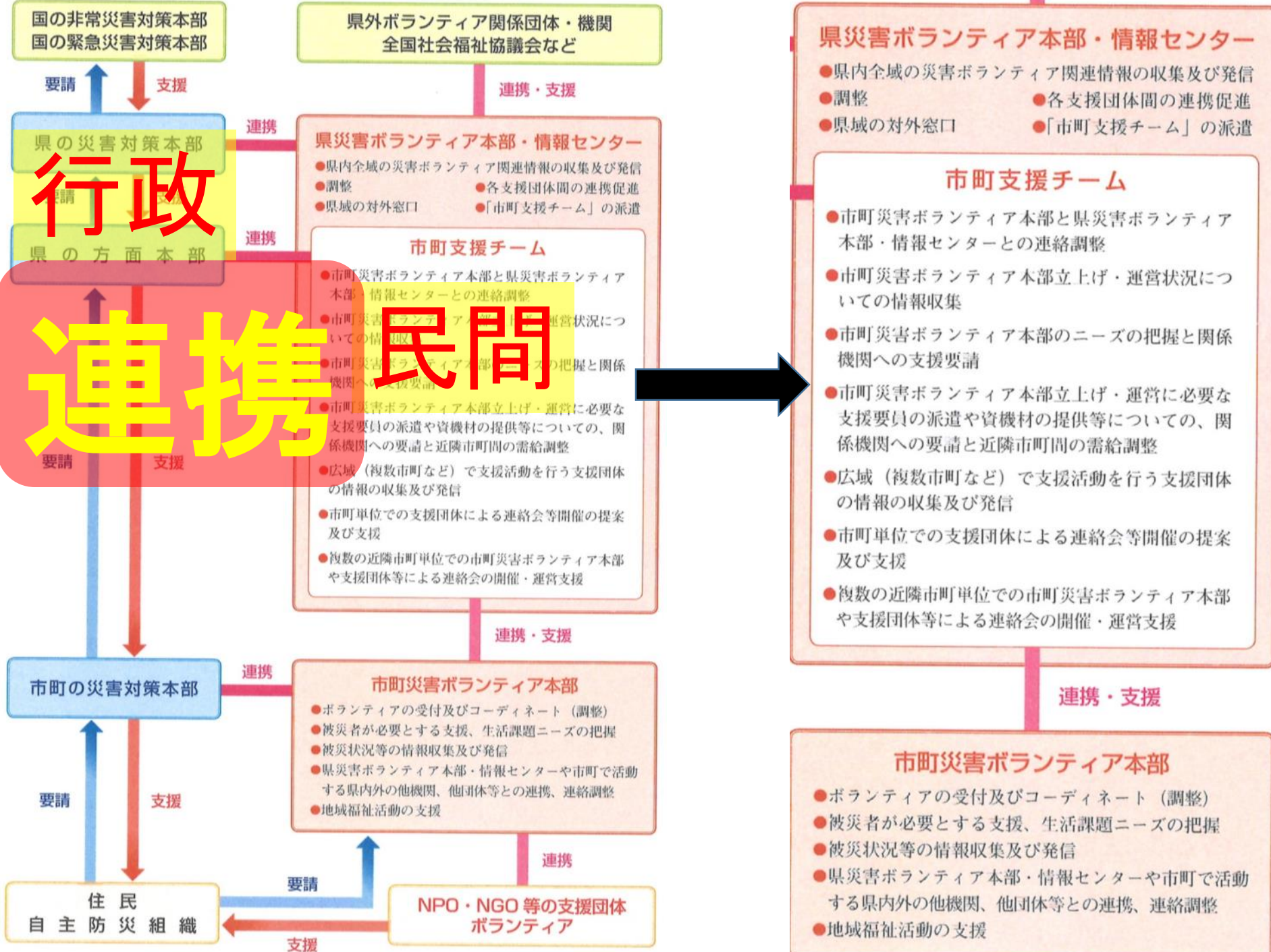
開催(年度)	財源	共催・協力
第1回(2005)	静岡県 の委託事業 + 静岡県ボランティア協会の自主事業	
第2回(2006)		
第3回(2007)		
第4回(2008)	<div data-bbox="473 521 966 635" style="border: 1px solid red; border-radius: 15px; padding: 5px; display: inline-block;"> 第6回訓練の5日後に 東日本大震災が発生 </div> 公益財団法人 静岡県労働者 福祉基金協会の 委託事業	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡県 ・静岡県社会福祉協議会 ・県内市町社会福祉協議会 ・静岡県労働者福祉協議会 ・連合静岡 ・静岡県労働金庫 ・ダイードリンコ ・伊藤園 ・NTT西日本静岡支店
第5回(2009)		
第6回(2010)		
第7回(2011)		
第8回(2012)		
第9回(2013)		
第10回(2014)		
第11回(2015)		
第12回(2016)		
第13回(2017)		
第14回(2018)	・エム・ビー・エス(株)	
第15回(2019)	第14回 第15回 ・常葉大学地域貢献センター	

Supported by  日本 THE NIPPON 財団 FOUNDATION

静岡式図上訓練開始のきっかけ

「東海地震が起きたら 静岡は大丈夫？」

平成17年(2005年)3月、※中越地震の5か月後
内閣府主催の**防災ボランティア活動検討会**で、
静岡県外の災害ボランティア関係者から
あがった**その一言**がきっかけ。



災害時の支援（受援）計画を実現可能かつより良い活動をするために、平常時から静岡県内外の災害ボランティアと関係者が信頼関係の構築と情報交換を行ない、災害時の迅速な救援・支援活動につながる体制づくりを図るため、東海地震をモデルに、災害ボランティアの広域支援体制について県内外の人たちが共に考える機会として「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」（図上訓練）を実施している

図上訓練ではない 「頭上訓練」の静岡式

静岡式は、行政や自衛隊などで行われる「状況への対応を検討する図上訓練（シミュレーション型図上訓練）」ではなく、

問題が与えられ、解決策を検討する中で、その問題と問題を抱えている地域への理解を深め、予防や人材発掘、ネットワーク作り等々を広く深く考えようという「ワークショップ型図上訓練」です。

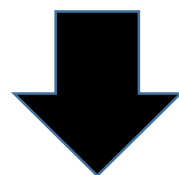
静岡式凶上(頭上)訓練の特徴

①地域を知る

災害リスクの大小高低、人的物的資源の状況など

②地域に起こると思われる被害を予測する

③被災者が何を求めるのか、またその被災者が求めるものが時間の経過と共にどう変わっていくのかを、過去の災害の教訓から学ぶ



これらの地域理解があってこそ「受援力」が生きる

【ベストプラクティス】 災ボラ東海訓練／6－1 5年間の試行錯誤生かし、政府の現地対策本部に参画（上）

中川和之 防災リスクマネジメントWeb編集長

8月31日と9月1日に行われた政府の総合防災訓練の一環として行われた東海地震の訓練で、被災地における政府の現地対策本部の開設・運営訓練が初めて行われ、現地対策本部要員の中に災害ボランティアの「広域支援連絡要員」としてNPO、NGOのスタッフ2人が参画した。これまで5年間にわたって、静岡県内のボランティアが静岡県と協働して、県外のボランティアらとともにやってきた広域の図上訓練の枠組みに対し、内閣府から訓練の協力要請があって実現。31日には、本部要員の各省庁職員とともに、立川の広域防災拠点から自衛隊の大型ヘリで静岡入りし、政府の要員と一緒に資機材の搬入も含めて現地対策本部を運用する一翼を担った。私もこの2日間、東京・霞が関の全国社会福祉協議会の会議室で、これらの訓練と連携して行われた東京拠点での訓練に参加したが、まずその経緯から紹介したい。

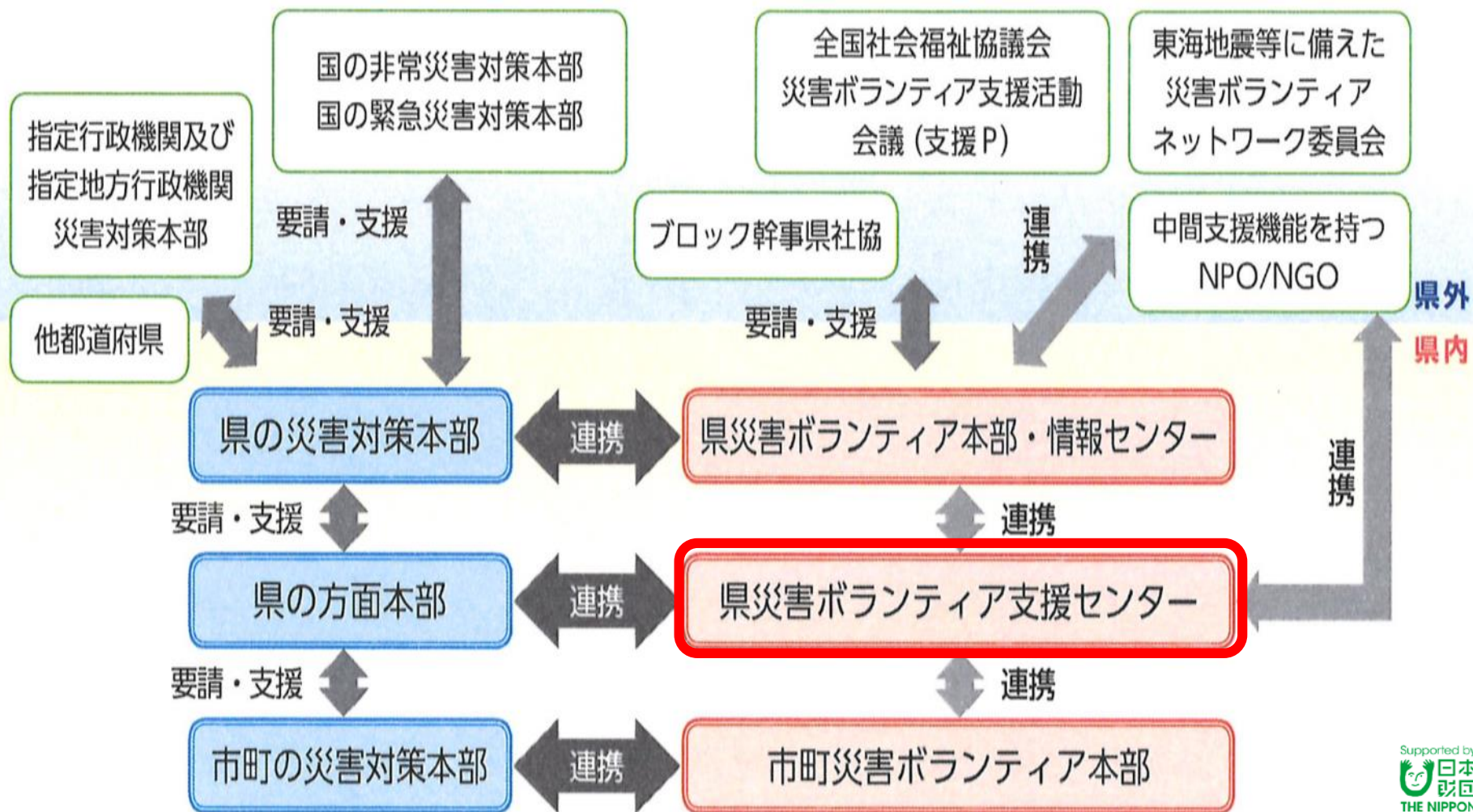


このような訓練が実現したのは、阪神大震災で大きく広がった日本の災害ボランティア活動については、2010年版防災白書で紹介されたアンケート調査で、災害時の被災者支援や災害復旧などでボランティアに期待する人が9割に達するなど、定着してきた現れだ。しかし、自治体の防災訓練などで、ボランティアが炊き出しをしたり、自分たちでボランティアセンター開設の訓練をしたりすることは珍しくないが、災害対策の意志決定の場である本部運用訓練にボランティアが参加したケースは、全国でも聞いたことがない。1日に中央防災無線を使って、静岡市の現地対策本部と東京のNPO・NGO関係者が行ったテレビ会議に立ち合った内閣府幹部は、テキパキと行われる情報交換に感心していたが、終了後に「双方とも全員が違う組織に所属している」と説明する

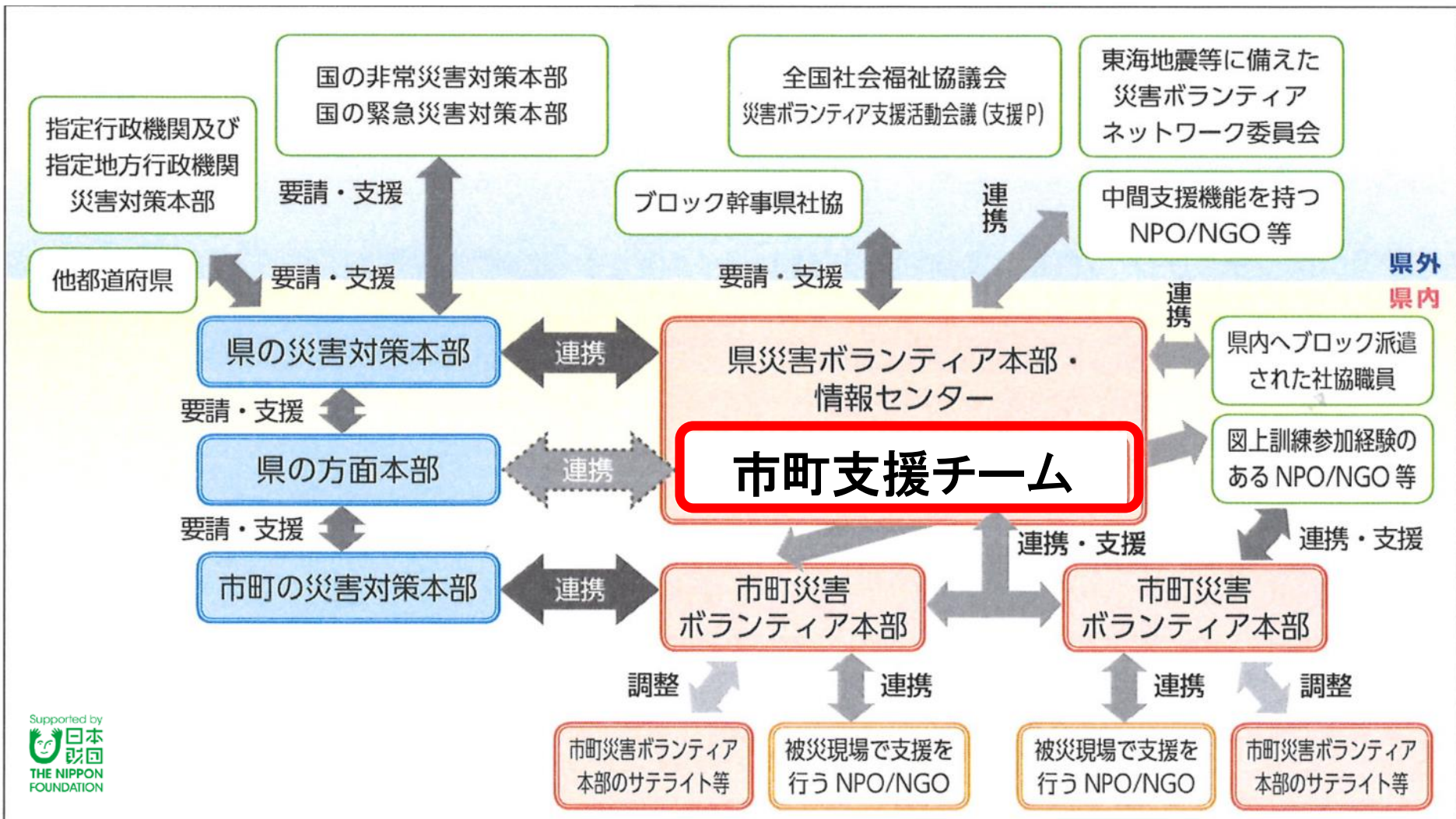


と、もっと驚いていた。

平成25年県地域防災計画修正前



平成25年県地域防災計画修正後



被災者・被災地の多様な困りごとと支援者がつながる
～事例から気づく 今からできること～


第13回(2017)

・日本財団の助成事業

Supported by  日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

- ・プレイヤーの取り組むワークの内容について、災害ボランティア本部(災害VC)を主語にしない
- ・参加すると「事例」というお土産が入手できる
- ・「ニーズ」とは言わず「**困りごと**」
- ・本訓練の参加が次のアクションにつながるための工夫を盛り込む(訓練後が重要)

第14回(2018)

- ・日本財団の助成事業  Supported by 日本 THE NIPPON 財団 FOUNDATION
- ・プレーヤーは事例(お土産)を持ち帰るとともに、訓練後に取り組むアクションプランを個々に作成
- ・アクションプランは県外プレーヤーにもアドバイスしてもらい、一人一つを完成させていった
- ・「多様」を実感し、日頃の取り組みに活かす
- ・グループワークをスムーズに進行するように、各グループに進行役(ファシリテーター)を配置した

平成25年(2013)の災害対策基本法改正で盛り込まれた

災害対策基本法 第五条の三

(国及び地方公共団体とボランティアとの連携)

第五条の三

- 国及び地方公共団体は、ボランティアによる防災活動が災害時において果たす役割の重要性に鑑み、その自主性を尊重しつつ、ボランティアとの連携に努めなければならない。

参加者の主体性が生む成果

- 何よりも県外の多様な地域からの参加者と知り合いになり、新たな**つながり**が生まれている
- 訓練を通して知り合った仲間同士が日常的に連絡を取り合うようになり、**お互いの地域の防災訓練等に参加するなどの動きにつながっている**
- 参加者属性も被災地支援や地域防災等に偏らず、多様な分野の参加者が「**凶上訓練**」をキーワードに集い、日頃からの**顔の見える関係づくりに寄与**している

こんな工夫をしています

1. 事前課題を参加要件に
2. 個人参加は原則不可
3. 常に複数の人で考え、意見を出し合う
4. いい訓練だったね で終わらせない訓練後
をイメージしてのプログラム(次のアクションへ…)
5. 参加するだけで「お土産」がある
6. できない→やらない ではなく、どうしたらで
きるか に気付くきっかけの付与
7. 被災した方 を基本に 支援者都合をなくす

こんな工夫をしています

- 毎回、テーマとともにゴールを決めて、ワークの内容を作り込んでいきます

- テーマを決めるのに1日かかることもあります

1日かけてでも、WGメンバーの想いや考えを出し合い、その中で人となりを徐々に理解していく過程を経て、チームビルディングがなされていきます

- 第15回のテーマは

ふだんの役割から一步はみだそう！

～誰もが担い手になれる「しずおか」を目指して～

第13回訓練のゴール

- 各地で行われている参加者が事例を持ち帰り、新たな出会い/つながりが見つかり、次のアクションを起こそうという気持ちになっている

<プレイヤー>

- 多様な困り事に対して、多様な支援が必要となる事を理解して新たなつながりを作ろうという気持ちになっている

<ビジター>

- 図上訓練の目的を理解し、他分野、異業種の支援の取り組みを知る

第14回訓練のゴール

- 参加者それぞれが訓練終了時にその後に行う具体的なアクションが決まっている

<プレイヤー>

- 立場の違う参加者がそれぞれ、訓練終了時に、その後行う具体的なアクションについて目標設定ができ、その実現のためにできることは何か、気づき、いつ、だれと、なにをやるか決まっている

<ビジター>

- 図上訓練の目的を理解し、他分野、異業種の支援の取り組みを知る

訓練の企画・運営

第1回(2005)～第3回(2007)では
図上訓練のつど世話人会を設けて実施していたが…

継続的に取り組むための場が必要では？



2008年に「東海地震等に備えた災害ボランティア
ネットワーク委員会」を設置(助成:静岡県労働者福祉基金協会)

- 平常時から県内外の災害ボランティアと関係者の信頼関係の構築と情報交換を行い、災害時に県内外の災害ボランティアの協力を得ながら、被災地での救援・支援活動を迅速に進めていくための、広域受援体制づくりと、広域支援体制のあり方を検討していく。

■第6回(2010年)図上訓練より、ネットワーク委員会の下に県内外の若手を中心とした企画・運営ワーキンググループを設置

メンバーの所属

NPO・NGO、社会福祉協議会、ボランティア団体、福祉施設、行政(県・市)、企業、助成団体、JC、士業、など

活動分野

災害・防災、福祉、海外支援・国際協力、子育て支援、中間支援、環境、教育、ファシリテーション、まちづくり、など

第14回 の様子

ワーキンググループで
作り込んだワークを
プレイヤーが実施して



県外プレイヤーの助言をもらいながら、
県内プレイヤー全員がアクションプランを作成

静岡県内のメンバーが成長

- 被災地支援の経験が少ない静岡県内のメンバーがワーキンググループの中心となり、ここまでの訓練の企画運営を主体的に積極的に担えるようになってきたことに加え、第13回の訓練では、進行の全てを県内のメンバーが担当し、県外メンバーは裏方に徹することができたことこそ、この訓練長年続けてきた最大の成果ということが出来ます
- 支えてくださる多くの関係者の方々のご協力とご理解があってこそその成果です
- 引き続き、よろしくお願いいたします